九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

六朝初唐の詠松詩について ： 王勃と劉希夷における「澗底の松」の源流をめぐって

中尾, 健一郎
九州大学大学院

https://hdl.handle.net/2324/1524299

出版情報：九州中國學會報. 41, pp.19-37, 2003-05-10. 九州中国学会
バージョン：
権利関係：

六朝初唐の詠松詩について

――王勃と劉希夷における「澗底の松」の源流をめぐって――

中尾健一郎

はしがき

古代より中国では、松は君子の樹である。それは『論語』子罕篇に「歳寒にして、然る後、松柏の後れて凋むを知る」、『礼記』礼器篇に「其れ人に在るは、竹箭の筠あるがごとく、松柏の心あるがごとし。……故に四時を貫いて柯を改め葉を易えざるなり」といった語が残されていることから見て取ることができる。また、『荘子』譲王篇にも孔子説話が見え、「天寒既に至り、霜雪既に降る。吾れ是れを以て松柏の茂るを知るなり」と述べられるように、困難に遭遇してもその姿を変えない節操の高さが、君子の生きざまに喩えられる樹である。[1]

こうした君子の樹である松は、自然、詩の題材となりうる。松を詠う詩を扱った先行研究には、辺土名朝邦氏の「中国の隠者　陶淵明『孤松』考」（『活水日文』第一二号、一九八五）がある。論文の冒頭に陶淵明「帰去来辞」に見える「孤松を撫つつ盤桓としてたちもとおる」（同論文一四頁）の箇所を挙げ、孤松を撫る陶淵明の内面世界、及び陶詩に詠われた松とその源流について論じられている。ただ、氏が取りあげている松を詠う詩は論文の性格上、基本的に陶淵明の孤松へと連なるものであるため、陶淵明以前の詩賦には劉楨「贈従弟」其二（『文選』巻二三）や潘岳「西征賦」

（『文選』巻一〇）等を除き、陶淵明の松と系統を異にするものは取りあげておられない。

ところで、松は君子の樹であるにとどまらず、有用な人材たる臣下に比喩されることがある。『文選』所収の「古詩（去者日以疎）」（『文選』巻二九）には「松柏摧かれて薪と為る」という句があり、『文選』の注釈者の一人である張銑はこれに「年代の久しく遠くして主無きを謂う」[2]と注する。張銑の注が当を得ているなら、松柏を有用の人材に喩える発想は、漢代には芽ばえていたことになる。筆者は、松を有用な人材に比擬する詠松詩[3]は西晋の左思に始まり、その後、東晋の劉琨の詩に展開されて初唐に至り、人材登用の気運の勃興と絡みあって、王勃の「澗底寒松賦」及び劉希夷「孤松篇」に結実したと考える。以下、魏晋より初唐へと継承される、人材の表象としての松に関する詠松詩や詠松賦を取り上げ、その発展と文学上の意義を考察しようと思う。

一　六朝期の詠松詩

（一）左思（二五三？～三〇七？）

西晋の人、左思は寒門出身の人である。彼の「詠史」詩には、魏の劉楨が「贈従弟」其二において、歳寒に耐える山上の松を詠ったのと対照的に、谷底の松が詠われている。それは不遇をかこつ寒門出身者の表象である。

鬱鬱澗底松　離離山上苗　　鬱鬱たり澗底の松、離離たり山上の苗
以彼径寸茎　蔭此百尺條　　彼の径寸の茎を以て、此の百尺の條を蔭う
世胄躡高位　英俊沈下僚　　世胄は高位を躡み、英俊は下僚に沈む
地勢使之然　由来非一朝　　地勢　之をして然らしむ、由来　一朝にあらず

金張籍旧業　七葉珥漢貂　　金張　旧業を籍(ふ)み、七葉　漢貂を珥(さ)す
馮公豈不偉　白首不見招　　馮公　豈に偉ならざらんや、白首まで招かれず

（西晋　左思「詠史」其二『文選』巻二一）

『文選』の注釈者の一人である呂延済は、この詩に「彼れは山苗を謂いて世胄に喩え、此れは澗松を謂いて英俊に喩う」と注する。[4]「澗底の松」と「山上の苗」とを寒門の英俊と貴族の子弟とに喩えた、というのである。また、同じく『文選』の注釈者の一人である李善は、詩の第九・十句に『漢書』を引き、前漢の金日磾、張湯の子孫が代々貴顕の家柄であったことをいうと注し、[5]また、最終句には荀悦『漢紀』を引き、馮唐が老人になってようやく郎中署長になったことをいうと注する。[6]呂延済や李善の注にしたがえば、左思は、門地の低い自分が野に埋もれ、門閥の子弟が栄華を極めているという時勢や、馮唐が年老いてようやく宮中に招かれたのにひき替え、自分自身は白髪頭になってもまだ招かれていない、という不満などを訴えたということになる。最終句の「白首まで招かれず」と同様の内容は、老年の作と思われる「白髪賦」にも詠われており、「咨(ああ)、爾(なんじ)白髪、世の途(みち)を観るに、栄を追わざるなく、貴きは華やぎ、賤しきは枯る」[7]と詠うくだりに、やはり「山苗」と「澗松」とに類似する表現が見える。また、賤しい身分のまま年老いてゆくことの悲哀が看てとれる。こうした嘆きは、寒門出身であった左思の倨傲と上昇志向の裏返しであるかもしれないが、いずれにせよ左思は不遇な自身を松に仮託し、自らを優秀な人材と見なしている。しかしまだ、人材を木材になぞらえるには至っていない。そうした試みは左思より少し遅れて、東晋の劉琨によって行われている。

（二）劉琨（二七一～三一八）

西晋から東晋にかけて活躍した劉琨は、左思と同様に自身を松に比擬している。[8]人材の比喩である松と棟梁とを結

びつけて詠う最初の例である。

南山石崔嵬　松柏何離離　南山　石崔嵬たり、松柏　何ぞ離離たる
上枝払青雲　中心十数囲　上枝　青雲を払い、中心　十数囲あり
洛陽発中梁　松樹竊自悲　洛陽　中梁発し、松樹　竊かに自ら悲しむ
斧鋸截是松　松樹東西摧　斧鋸　是の松を截り、松樹　東西に摧く
持作四輪車　載至洛陽宮　持して四輪の車を作り、載せて洛陽の宮に至る
観者莫不歎　問是何山材　観る者　歎かざるなく、問うらくは是れ何れの山の材ぞと
誰能刻鏤此　公輸与魯班　誰かよく此れを刻鏤せん、公輸と魯班とあり
被之用丹漆　薫用蘇合香　これを被うに丹漆を用い、薫ずるに蘇合の香を用う
本自南山松　今為宮殿梁　本南山の松よりし、今は宮殿の梁となる

（西晋　劉琨「扶風歌（艶歌行）」『藝文類聚』巻八八　木部柏所引）

この詩の第二句には「松柏」の二字が使用されているが、第六・八句に「松樹」、第七・十七句に「松」字が見え、「柏」の字は他には用いられないため、実際は松を詠ったものである。この伐採されることを悲しむ南山の松は、自身の身を切られる苦痛を述べ、また、これを観る人も同情を禁じ得ない、という。

劉琨以前に松の感情を詠うものはあまり例を見ない。[9] しかし、劉琨の「艶歌行」と内容の似かよった作品がある。漢代の作と見られる古楽府「予章行」である。白楊を詠ったものであるが、次に欠字のある聯を除いてあげると、

白楊初生時　乃在予章山　白楊　初めて生ぜし時、乃ち予章の山に在り
上葉摩青雲　下根通黄泉　上葉は青雲を摩し、下根は黄泉に通ず
涼秋八九月　山客持斧斤　涼秋　八九月、山客　斧斤を持つ

（中略）

根株已断絶　顛倒巌石間　　根株　已に断絶し、巌石の間に顛倒す

大匠持斧縄　鋸墨斉両端　　大匠　斧縄を持ち、鋸墨　両端を斉しくす

一駆四五里　枝葉相自捐　　一たび駆けること四五里、枝葉　相い自ずから捐つ

（中略）

身在洛陽宮　根在予章山　　身は洛陽の宮に在り、根は予章の山に在る

多謝枝与葉　何時復相連　　多謝す　枝と葉と、何時か復た相い連ならん

（中略）

何意万人巧　使我離根株　　何ぞ意わん　万人の巧の、我をして根株と離れしめんとは

（古楽府「予章行」『楽府詩集』巻三四、相和歌辞）[10]

アーサー・ウェイリー氏は、この楽府には離別の主題とともに、国家の必要をみたすために盛りのうちに断ち切られるという主題があると述べるが、[11]そうであれば、白楊と松の違いはあるものの、劉琨の「艶歌行」は「予章行」を継承したものと見なすことができる。西晋の滅亡後、東晋の将軍として重用された劉琨の松と、国家に徴用され、知友と引き離される人々の寓意である白楊とは、国家に役立てられるという面では重なり合っているからである。

しかし、劉琨の「艶歌行」と「予章行」との間には明らかな違いがある。それは、前者の松が「棟梁」に加工され、その役割に甘んじることである。「棟梁」を国家の枢要の人物に喩える語は、『呉越春秋』に見える。[12]また、筆者は以前、西晋の司馬彪の「贈山濤詩」（『文選』巻二四）を取りあげて論じたことがあるが、[13]公輸般等の名工は執政の比喩である。「予章行」の作者がもっぱら徴用され、知友と別れることの悲しみを詠うのと異なり、劉琨は自分が重用されたことを、棟梁の松に比擬しているのである。

ところで、劉琨の「艶歌行」には、「松樹、竊かに自ら悲しむ」と、松が悲しむことが詠われるが、松が棟梁に甘んじることを詠うのは何故だろうか。筆者が思うに、それは、劉琨が個人の感情よりも、国家の利益を優先させたからである。『文選』には、劉琨がかつての部下であった盧諶に宛てた書簡が収められており、これに、「夫れ才の世に生ずれば、世実に才を須う」[14]と述べられている。人材が生まれれば、天下はその人材を活用する、というのである。東晋の将軍職にある劉琨が、自分自身を人材と見なしているのは言うまでもない。また、劉琨の忠誠心は、中原を去り、東南の建康（現在の南京）へと逃れた元帝に奉じた上奏文に現れている。

臣当に首は戎行を啓き、身は士卒に先んずべし。臣と二虜とは、勢い並び立たず。（劉）聡・（石）勒を梟せずんば、臣に帰る志なし。庶わくは陛下の威霊を憑み、微意をして獲展せしめん。然らば後、頭を隕として国に謝し、没すとも恨みなし。[15]

（『晋書』巻六二、劉琨伝所収「表」）

西晋を壊滅せしめた夷狄をさらし首にするまで帰るつもりはなく、また、望みを果たすことができたならば、死んでも恨まない、というのである。身を殺しても忠誠を尽くすという劉琨の姿勢が、伐採されようとも棟梁の任に甘んじる松に通底するのは明らかであろう。劉琨が詠った棟梁の任に堪えうる松は、後述するように、唐代の詩人へと受け継がれていく。彼の「艶歌行」は、人材を棟梁に喩える表現の先蹤となったのである。[16]

以上、左思、劉琨の詠松詩を取りあげて、魏晋期における詠松詩の特徴ある典型と見なした。これ以降、六朝の詩賦に詠松の作は少なくないが、[17]左思のように不遇な自身を松に仮託して詩を詠んだものには、梁の呉均がいるに過ぎない。[18]その他は概ね、松を君子に喩えて詠ったと見なされるものか、移ろいゆく自身と常緑の松とを対比させ、人生の儚さを詠ったものかである。[19]そうした意味では、辺土名氏が前掲論文で論じた魏晋期の松のイメージは、左思と劉琨、及び呉均を除けば魏晋以降もほとんど変化が見られない。

さらにつけ加えるならば、六朝の詠松詩には、もう一つ特徴的な傾向が見られる。それは、自身を棟梁に喩える詩、つまり劉琨の詠松詩に類するものがほとんど見られないことである。東晋の袁宏に棟梁たる松を詠じた詩[20]があるが、これを除いて棟梁の松を詠う詩はまったくない。

ただ、賦においては例外が見られる。それは、南斉謝朓の「高松賦」である。これには、『詩経』の魯頌閟宮に見える「徂徠の松」が取りあげられ、「乃ち己を屈し、以て弘(おお)いに用いらるれば、大壮を雲台に構えん。幸い君子に翫(め)でられ、神心を留めて懐を顧みる」、と詠われている。[21]賦が作られた当時、謝朓は「竟陵の八友」と呼ばれる竟陵王蕭子良の詩客であった。[22]謝朓が自身を松になぞらえるのであれば、「高松賦」に、「屈己」の二字を用いるのは宮仕えの苦しみを言い、また、幸い君子に愛でられると詠うのは、竟陵王に詩客の身分を与えられていることを言うのであろう。注目されるのは、君子に賞玩されることを幸いとしながら、松が大建築に利用できる有用の材である、と主張されていることである。このような表現に、自分は国家を担う才覚がある、という謝朓の自負が見てとれる。棟梁を詠う詠松詩がほとんど無い東晋以後、謝朓の「高松賦」は、劉琨の「艶歌行」と初唐詩人の詠松詩とを繋げる役割を果たしたと言えるのではなかろうか。

次章には、初唐の詩人たちが、左思及び劉琨の詠松詩を継承しながら、それまでの詠松詩とは異なる傾向を生み出したことについてふれたい。

二　初唐期の詠松詩

（一）王績（五八五～六四四）・王勃（六四七～六七五）

隋から初唐にかけての詩人、王績は陶淵明の影響が強く見られる詩人である。しかし、中村昌彦氏が「隠逸詩人王績の自己矛盾」（『九州中国学会報』第二十八巻、一九九〇）に明らかにしたように、彼は単なる陶淵明の模倣者ではなく、晩年に至るまで、出仕と隠遁との間で葛藤があったものと目される。ただ、老年にあっては老荘思想が重んじられたようであり、[23]その詠松詩は陶淵明「飲酒」其八と同様に、歳寒の孤松を詠う。[24]

松生北巌下　由来人径絶　　松は生ず北巌の下、由来　人径絶ゆ
布葉捎雲烟　挿根擁巌穴　　葉を布きて雲烟を捎い、根を挿して巌穴を擁す
自言生得地　獨負歳寒潔　　自ら言う　生ずるに地を得たり、独り歳寒の潔を負うと
何時畏斧斤　幾度経霜雪　　何時ぞ斧斤を畏れん、幾度か霜雪を経ん
風驚西北枝　雹損東南節　　風は西北の枝を驚かし、雹は東南の節を損なう
不知歳月久　稍覚枝條折　　知らず　歳月の久しくして、稍く枝條の折るるを覚え
藤蘿上下砕　枝幹縦横裂　　藤蘿は上下に砕け、枝幹は縦横に裂く
行当糜爛尽　坐共灰燼滅　　行くゆく当に糜爛して尽き、坐ろに灰燼と共に滅すべし
寧関匠石顧　豈為王孫折　　寧くんぞ匠石の顧みるに関わらん、豈に王孫の折るところとならん
衰盛自有期　聖賢未嘗屑　　衰盛　自ずから期あり、聖賢　未だ嘗て屑みず
寄言悠悠者　無為嗟大耋　　言を寄す悠悠たる者、大耋を嗟くを為すなかれ

（初唐　王績「古意」其四『四部叢刊』続編所収『東皐子集』巻中）

王績がここに描いたのは、やがて老い滅びようとしながらも「歳寒の性」を持し、工匠や貴公子の目に付かずとも憂うることのない松である。ところで、第十七・十八句に見える「匠石」と「王孫」であるが、何ゆえに彼らが登場するのであろうか。思うに、この対句は沈約「霜来悲落桐詩」（『玉台新詠』巻九）に見える、「匠者時留盻、王孫少見之」という句を踏まえている。筆者は桐の詩に現れる「匠石」や「王孫」は為政者の喩えであることを論じたことがあるが[25]、ここでも同様の意で用いられている。何故なら、兄である文中子王通の不遇を述べるにあたって、彼は王通が為政者に採りあげられないことを、『書経』禹貢に見える「嶧陽の桐」に喩えるからである。

然れども嶧陽の桐、必ず伯牙を俟ち、烏号の弓、必ず（養）由基を資く。苟しくも其の人にあらざれば、道虚しく行われず。[26]

（「答程道士書」『東皐子集』巻下）

桐が伯牙を待ち望むことは、既に司馬彪「贈山濤詩」（『文選』巻二四）に見える。[27]つまり、王績は桐に仮託して登用されることを願った沈約らとは異なり、自らを有用な松に喩えながらも、自身は国家の登用を望まない、と詠じたのである。そうした発想は老荘的であるが、中村氏が述べるように、本来、王績は常に儒学的理念を潜在させており、老荘はその理念の行き詰まりに対する反発に過ぎなかった。[28]したがって、王績は自身を有用な人材と見なしていたはずである。それゆえに、老荘的立場から詠ったその詩には、為政者の喩えである工匠等に顧みられなくともかまわない、という屈折した表現が盛り込まれることになったのである。

王績の詩の功績は、あらためて歳寒の松を、加工される可能性を持つものとして詩に表現したことであろう。何故ならば、後述するように、初唐においては王績以後の詩人が、歳寒、不遇の松を詠う場合、木材と絡めて表現されるからである。王績の有力な継承者は、その兄王通の孫である王勃である。[29]

初唐の四傑の一人である王勃は、歳寒の松を木材に喩えて「澗底寒松賦」を作っている。その序文を挙げると、

歳八月壬子、蜀に旅遊し、茅渓の澗を尋ぬ。深渓磴を絶ち、人迹到ること罕なり。爰に松有り、霜を冒し、雪を亭め、蒼然として百丈あり。柯を崇くし、穎を俊くすといえども、其の岸を踰ゆるあたわず。嗚呼、斯の松、託するは其の所にあらず。出群の器、何を以てか別たれん。蓋し物の類を殊にして情に合する有り、士の感に因りて興を成す有り。[30]

王勃は、人跡も稀な深山幽谷に生える松に感じるところがあり、谷底に生える歳寒の松を賦す。彼は松の様子を描写した後、賦の最後段において次のように悲嘆する。

已んぬるかな。蓋し用の軽きは、則ち資さるること衆く、器の完きは、則ち施さるること寡なし。信に棟梁の已に成り、榱桷の相い仮るにあらず。徒らに志遠くして心は屈し、遂に才高くして位は下し。斯に物在りて有り。余、何為れぞ悲しめる者ならん。[31]

（初唐　王勃「澗底寒松賦」『文苑英華』巻一四三、草木一所収）

王勃は賦の序文に、「物の類を異にして情に合する有り」と、松と自身とは異なる存在であるが気持ちは同じである、と述べている。その気持ちとは、賦に嘆かれているように小材は用途が多いのに完全な木材は用途が少なく、棟梁の材は既に用が足りているので、この松には使いみちがない、ということである。王勃の賦が左思の詠史詩を踏まえるのは明らかであるから、松が王勃自身と重ね合わせられていることは言を俟たない。また、松を棟梁の材として詠うことが、劉琨の「艶歌行」を継承するものであることも明らかである。ただ、王勃の賦と「艶歌行」との違いは、既に棟梁に仕立てあげられた松でなく、手つかずの状態にある松が、本来ならば棟梁の材として用いられるべきである、と詠われていることである。

近年、尹占華氏は唐代の詠松賦について、王勃等の賦は志かなわず、地位の低いことに由来する不平感が詠われている、と指摘する。[32] 氏の説は十分な説得力を持つものである。何故なら、賦の序文に言及のある王勃の入蜀は、『新

唐書』文芸伝に見える、高宗の怒りを買って沛王府より追放された「檄英王鶏文」事件の翌年だからである。[33] 自身の才能を強く自負しながら蜀の地で不遇をかこつ王勃が、誰にも知られることのない松に自身の姿を重ねたであろうことは想像に難くない。そこには、やはり強い自負を持ちながら隠遁生活に甘んじた王績の姿も意識されたことであろう。

ところで、左思・劉琨の詩に用いられた手法によって、低い地位に甘んじる人材を詠った王勃の詠松賦が、重要な作品であることは間違いない。何故なら、王勃の詠松賦は、初唐詩人の詠松詩に受け継がれるからである。

（二）劉希夷（六五一～六八〇）・張宣明（？～？）

王勃の詠った棟梁の材である松は、同じく初唐の劉希夷と張宣明に受け継がれている。[34] 劉希夷は、「年年歳歳、花相い似たり、歳歳年年、人同じからず」の句で有名な、「代悲白頭翁」の作者である。梁粛の『大唐新語』には、彼の詩が時の人に重視されなかったことが述べられており、[35] その詠松詩に詠われる谷底の松にも、知己のいない孤独な作者自身の姿が投影されている。

独有南澗松　不歎東流水　　独り南澗の松あり、東流の水を歎かず
玄陰天地冥　皓雪朝夜零　　玄陰　天地冥く、皓雪　朝夜零つ
豈不罹寒暑　為君留青青　　豈に寒暑に罹らざらん、君が為に青青を留む
青青好顔色　落落任孤直　　青青として顔色好く、落落として孤直に任ず
（中略）
清泠有真曲　樵採無知音　　清泠として真曲あるも、樵の採りて知音なし

美人何時来　幽径委緑苔　美人　何時か来たらん、幽径　緑苔に委ぬ
吁嗟深澗底　棄捐広廈材　吁嗟（ああ）　深澗の底、広廈の材を棄捐す

（初唐　劉希夷「孤松篇」『全唐詩』巻八二）

詩題に「孤松」の二字が見えるが、これは、『世説新語』容止篇に見える「嵇叔夜の人となり、巖巖として孤松の独立するがごとし」[36]という評語が意識されているであろう。この詩には、すぐれた資質を持ち、棟梁の材であるのに、良き人に知られずにいる松が詠われている。詩のモチーフは王勃の「澗底寒松賦」の松を踏襲しているので、劉希夷が王勃の影響下にあることがわかる。賦と詩という形式面の外に異なるのは、劉希夷が、松は薪を採る樵人ではなく、美人を待ち望んでいる、と詠うことである。美人とは、『楚辞』以来君主の比喩であるから、美人を待ち望む松の詩は、劉希夷が君主に登用されない不遇を詠った詩である、と言えよう。

初唐において、王績は為政者に顧みられない自身を松に仮託して詠い、王勃は谷底の松に自分自身の境遇を重ね合わせて詠った。そして劉希夷は、国家に登用されることを待ち望む不遇な詩人の表象として松を詠ったのである。

劉希夷の「孤松篇」が、どのような経緯で作られたかは不明であるが、その詩は単なる詩人のつぶやきに終わらなかったと考えられる。何故なら『大唐新語』に、張宣明が劉希夷の「孤松篇」と同工異曲の詩を作り、その詩が有力者に称賛されたことが見えるからである。まず、張宣明の詩を見よう。

孤松鬱山椒　肅爽凌青霄　孤松　山椒に鬱（さか）んにして、肅爽　青霄を凌ぐ
既梃千丈幹　亦生百尺條　既に千丈の幹を梃し、亦た百尺の條を生ず
青青恆一色　落落非一朝　青青として恆に一色、落落として一朝にあらず
大厦今已搆　惜哉無人招　大厦　今已に搆えられ、惜しいかな　人の招くなし
寒霜十二月　枝葉独不凋　寒霜　十二月、枝葉　独り凋まず

（初唐　張宣明「山行見孤松成詠」『全唐詩』巻一一三）

この詩にも、やはり棟梁の任に堪えうる松が詠われている。その内容は、王勃の「澗底寒松賦」に同じく、すでに大建築は完成しているので、千丈の松は使途がない、ということである。その詩は次のように称賛されている。

張宣明、胆気あり、詞翰に富む。嘗て山行し孤松を見、賞玩これを久しくし、乃ち詩を賦して曰く、（中略）鳳閣舎人梁載言、これを賞して曰く、「文の気質、長松に減ぜざるなり」、と。宣明、郭振の判官と為り、使いして三姓咽麺に至る。（以下略）[37]

（『大唐新語』巻八、文章）

梁載言の名は『旧唐書』文苑伝に見える。武后の時に鳳閣舎人、知制誥を務め、中宗の時に刺史に任じられたことのほかに詳しい経歴はわからない。鳳閣舎人は中書舎人のことであるから、張宣明が自身の抱負を大官である彼に伝えたと解釈する余地があろう。また、こうした不遇な人材を棟梁たるべき松に喩える詩が制作される背景には、国家が人材を木材に喩える修辞を用いて在野の賢人を求め、人材の登用を盛んに喧伝した初唐の気風があったと考えられる。初唐期、太宗は貞観十五年（六四一）に人材の登用に関する詔を発しているが、その一部を挙げると、

朕遐かに前載を観て、列辟を歴選すれば、此に人を得んことを貴び、茲に多士を崇めざるなし。猶お股肱の元首を佐くるは、譬えば舟楫の（船を）巨川に済すがごとし。若夫えば大厦を構うる者は、衆材を山岳に採り、善く国を為す者は、異人を管庫に求む。（以下略）[38]

（「求訪賢良限来年二月集泰山詔」『大唐詔令集』巻一〇二　挙薦上）

貞観の治で知られる太宗の詔には、人材の登用に対する彼の意欲が顕著に現れている。国家が大規模な建造物である「大厦」に喩えられ、それを支える人材が木材に喩えられているのである。また、清の徐松の『登科記考』巻二には、高宗の顕慶四年（六五九）に「材称棟梁、志標忠鯁科」といった科目が見える。皇帝が国家の棟梁たる人物の登用を欲したことが看取されるであろう。こうした為政者の姿勢が、科挙の詩題に反映されないはずがなく、則天武后

の垂拱元年（六八五）には、「高松賦」が課せられている。[39] 王勃は高宗期、劉希夷・張宣明は武后期の人であるから、彼らの詠松詩はこうした人材登用の気運の中で生み出されたと言っても過言ではない。王勃・劉希夷らは初唐以前の詠松詩に学び、その滋養を十分に吸収した上で、自身が立派な人材であることを、建材として有用な松に仮託して主張したのである。

結　語

以上、六朝より初唐にかけて作られた詠松詩を取り上げ、初唐の詩人である王勃や劉希夷の詩賦が、左思と劉琨の手法を取り入れていること、それが人材登用の風潮の中で成立したものであることを述べた。また、それらに顕著な特徴は、劉琨や謝朓が詠ったように、国家に登用されることは、本来、個人的な感情に制約を加えられることであるのに、王勃や劉希夷らが、松をかりて不遇を訴え、自らが登用を望んでいる、と主張したことである。六朝の詠松詩と初唐の詠松詩との違いはこの点において、もっとも明瞭であると言ってよい。

さらに強調しておかねばならないのは、これら初唐詩人の詩賦が、後世に大きな影響を与えていることである。そのもっとも大なるものは、白居易の「新楽府・澗底松」である。これは天子を読者として想定されたものである。[40]

有松百尺大十囲　生在澗底寒且卑　松有り　百尺にして大なること十囲、澗底に生え　寒にして且つ卑し
澗深山険人路絶　老死不逢工度之　澗深く山険しくして人路絶え、老死して工の之れを度るに逢わず
天子明堂欠梁木　此求彼有両不知　天子の明堂　梁木を欠き、此れ求め　彼れ有るも両に知らず

（中唐　白居易「新楽府・澗底松」念寒儁也『白氏文集』巻四）

左思の詠松詩を踏まえつつ、その眼目は天子の求賢の姿勢と、在野の人材の希望とが齟齬をきたしていることを主

張することにある。元和四年（八〇九）、諫官である左拾遺となった白居易は、[41] 自らを松に仮託するのではなく、第三者の立場から天子に人材登用の状況を改めることを諷諫するのであるが、こうした手法が誕生する背景にあったのは、詩人が自らを棟梁たるべき松に喩える先例が初唐期に存在したことである。その意義は、決して忘れられてはならないであろう。

最後に、白居易が元稹に和して作った「和答詩十首・和松樹」（『白氏文集』巻二）[42] より、白居易の天子に対する忠誠を示した詩句を以て、小論の結びに代えたい。

尚可以斧斤　伐之為棟梁　　尚お斧斤を以て、これを伐ちて棟梁と為すべし
殺身獲其所　為君構明堂　　身を殺しその所を獲（え）て、君が為に明堂を構えん

注

（1）『論語』『礼記』『荘子』讓王篇の他に、辺土名朝邦氏の「中国の隠者　陶淵明『孤松』考（『活水日文』第一二号、一九八五）には、松が『荀子』大略篇、『荘子』徳充符篇に見える清潔な士人の人格と結びつけられていることが述べられる（一六頁）。また、同論文には潘岳「西征賦」（『文選』巻一〇）の「勁松彰於歳寒、貞臣見於国危」の二句が論語の伝統を引くものとされる。なお、本稿においては、「松柏」など、柏が松と異なる属性を持つものと特に見なされない場合は、これを松と同一視する。また、引用する詩人の生卒年に関しては、六朝時代の詩人は興膳宏編『六朝詩人伝』（筑摩書房、二〇〇〇）に、唐代の詩人は小川環樹編『唐代の詩人』（大修館書店、一九七五）にしたがった。

（2）以下注の原文、「謂年代久遠無主矣」（五臣・張銑注）。

（3）詠松詩は、四句以上で構成されるものの中、基本的に詩題に「松」字を用い、かつ松を描写するもの、及び『初学記』『藝文類聚』といった類書の「松部」に収められているものとするが、「詠史」等、松を詠いつつ詩題に松字を用いないものに関しては、詩の冒頭二句中に松を詠い（柏以外の樹と対句になっているものは除く）、かつ第三句以降に松の状態、性質等の描写があるものと定義する。

(4) 彼謂山苗喩世胄、此謂澗松喩英俊。

(5) 班固、漢書金日磾贊曰、「夷狄亡国、羈虜漢庭。七葉内侍、何其盛也」。七葉、自武至平也。又張湯伝贊曰、「張氏之子孫相継」。宣元已来、為侍中・中常侍者、凡十余人。功臣之後、唯有金氏張氏。親近貴寵、比於外戚。

(6) 荀悦漢紀曰、馮唐白首、屈於郎（中）署（長）。

(7) 咨爾白髮、観世之途、靡不追栄、貴華賤枯（『藝文類聚』巻一七、人部髮所引）。

(8) 逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』巻中（中華書局、一九八三）、「扶風歌」（艶歌行）に付せられた逯氏の説にしたがう。逯氏は〔北宋〕呉淑『事類賦注』巻二十五、木部柏（「南山聞越石之詠」の注に「扶風歌」が引用されている）等を根拠とする。長谷川滋成氏の『東晋詩訳注』（汲古書院、一九九四）劉琨の項に、同詩が採用されている（二八、二九頁）のも同様の見解によるであろう。なお、劉琨には『文選』巻二八に、同題の「扶風歌」があるので、便宜上、小論では劉琨の詠松詩を「艶歌行」と呼ぶ。

(9) 強いて挙げれば、前漢の班婕妤「擣素賦」（『古文苑』巻三）に、「雖松梧之貞脆、豈栄彫其異心」と、常緑の松も落葉の桐も、秋の訪れを感じる心は同じであるとされている。また、劉琨とほぼ同時代の詩人である陸機「歎逝賦」（『文選』巻一六）に「信松茂而柏悦」と、松が茂ればその同類である柏が悦ぶとする句が見えるのみである。

(10) 四部叢刊初編本『楽府詩集』によるが、中華書局本（一九七九年初版）にしたがい、一部文字を改め、補った。

(11) ウェイリー著、小川環樹、栗山稔訳『李白』（岩波新書、一九七三）の一三七頁を参照。ウェイリー氏の見解は、李白の「予章行」（〔清〕王琦注『李太白文集』巻八）と、古楽府を比較するにあたって示されたものである。

(12) 『呉越春秋』勾践入臣外伝に、越の范蠡と並ぶ名臣文種を、「大夫文種者、国之梁棟」と評した語が見える。

(13) 拙稿「六朝詠桐詩考――沈約より庾信に至る「龍門の桐」――」（『九州中国学会報』第四十巻、二〇〇二）を参照。西晋の司馬彪と東晋の劉琨とは、時代が近いことから、同様の寓意がこめられていると解してよかろう。

(14) 夫才生於世、世実須才（「答盧諶詩」並書『文選』巻二五）。

(15) 臣当首啓戎行、身先士卒。臣与二虜、勢不並立。聡勒不梟、臣無帰志。庶憑陛下威霊、使微意獲展。然後隕頭謝国、没而無恨。

(16) 『世説新語』賞誉篇には、次に挙げるように庾子嵩が温嶠を棟梁の器として賞賛した故事が見える。「庾子嵩目和嶠、『森森如千丈松、雖磊砢有節、施之大厦、有棟梁之用』」。余嘉錫『世説新語箋疏』（上海古籍出版社、一九九三）賞誉篇の箋疏に

は、これが西晋の和嶠でなく東晋の温嶠の故事であると考証されているので、これにしたがう。こうした評語がなされたのも、松を棟梁として見立てた劉琨の詩があってのことと思われる。

(17) 小論に詩題を挙げていない、六朝期における詠松の詩賦を以下に挙げる。『初学記』巻二八・木部松所引、〔梁〕范雲「詠寒松詩」、沈約「寒松詩」、呉均「詠慈老磯石上松詩」、〔隋〕煬帝「詠北郷古松樹詩」、李徳林「詠松樹詩」（以上詩）。〔西晋〕左宮嬪「松柏賦」、〔梁〕王僉「和蕭子良高松賦」（以上賦）。『藝文類聚』巻八八・木部松所引、〔西晋〕傅玄無題詩（飛蓬随飄起）、張華無題詩（松生壠坂上）、〔東晋〕許詢無題詩（青松凝素髓）、王凝之妻謝氏「擬嵇中散詩」（以上詩）。〔梁〕沈約「高松賦」（以上賦）。『文苑英華』巻二四七・寄贈一所収、〔梁〕呉均「贈王桂陽詩」。その他、陶淵明「雑詩」其十二（四部叢刊初編所収『箋注陶淵明集』巻四）、鮑照「松柏篇」（四部叢刊初編所収『鮑氏集』巻八）がある。

(18) 梁の呉均の詠松詩は、左思詩の悲嘆と同工異曲であり、正しい心を抱きながらも、門地の低さのために「細草」のごとき小人物たちに見下されている、という悲哀が詠われている。呉均とその松を詠う詩については、森野繁夫氏の『六朝詩の研究』（第一学習社、一九七六）に一節を割いて論じられている。参照されたい。

(19) 傅玄と張華の無題詩（ともに『藝文類聚』巻八八、木部松所引）、及び鮑照の「松柏篇」は、自身に擬したというよりは、移ろいゆく自身と常緑の松とを対比させ、人生の儚さを詠ったもののように見受けられる。

(20) 袁宏の無題詩は以下の通り。「森森千丈松、磊砢非一節、雖無榱桷麗、較為梁棟桀」（『藝文類聚』巻八八、木部松所引）。森野繁夫氏は前掲著書に、これが『世説新語』賞誉篇に見える庾子嵩の評に基づく、遊戯的な詩とする見解を示す（二六頁）。こうした詩が作られたのも、松を棟梁として見立てた劉琨の詩があってのことと見られる。

(21) 若乃体同器制、質兼上才、夏書称其岱畎、周篇詠其徂徠。乃屈己以弘用、構大壮於雲台。幸為翫於君子、留神心而顧懐（四部叢刊初編所収『謝宣城詩集』巻一）。

(22) 曹融南『謝宣城集校注』（上海古籍出版社、一九九一）附録、「謝朓事跡詩文繫年」に曹氏は、この賦の成立を南斉の永明五年（四八七）頃とし、竟陵王蕭子良の命により、王僉、沈約と共作したものとする。これにしたがう。

(23) 「贈薛学士方士」（陳尚君輯校『全唐詩補編』所収『全唐詩続拾』巻一、中華書局、一九九二）に、「昔歳尋周孔、今春訪老荘」の句が見える。なお、王績の詩文は、基本的に四部叢刊続編所収『東皐子集』に拠ったが、韓理洲校点『王無功文集』（上海古籍出版社、一九八七）の校訂にしたがい、一部を改めた。

(24) 陶淵明の松については、見解の分かれるところである。宋の洪邁『容斎三筆』巻一二、「淵明孤松」に「淵明詩文率皆紀実、

雖寓興花竹間亦然。（中略）其飲酒二十首中一篇云、青松在東園、（中略）所謂孤松者是已、此意蓋以自況也」、王瑤氏の『陶淵明集』（作家出版社、一九五六）、「飲酒」其八注に「陶詩中常常以孤松自況、這里也是為自己写照」と述べられている。注1所掲、辺土名氏の論文では、必ずしも飲酒詩の松を陶淵明の分身とは見なしてはおられないが、松が自己を投影したものである点については相違ないものと思われる。一海知義・興膳宏『陶淵明・文心雕龍』（筑摩書房、一九七六）に、一海氏は「飲酒」其八の松について、「それが直接自らをたとえるものでないとしても、すくなくともその理想像として、読まれねばならぬ」（九四頁）と述べておられる。このあたりが妥当な見解であろう。

(25) 注13所掲、拙稿を参照。

(26) 然嶧陽之桐、必俟伯牙、烏号之弓、必資由基。苟非其人、道不虚行。

(27) ただし、「贈山濤詩」に詠われる桐は、嶧陽の桐ではない。嶧陽の桐を琴に加工することを詠った詩には、北魏の鹿悆「諷真定公詩」第一首（『古詩紀』巻一一八）がある。

(28) 中村氏の前掲論文、八二頁を参照。

(29) 王績から王勃までの間の詩人の賦に、謝偃（『新唐書』文芸伝に本伝）の「高松賦」（『文苑英華』巻一四三、草木一所収）、崔敦礼（『新唐書』巻一〇六に本伝）の「植松賦」（『全唐文』巻一三五）がある。いずれにも松が良材であることが詠われている。「澗底寒松賦」には、王績詩のほかにこれらの賦の影響も見られるかもしれない。その他、無名氏の「幽松賦」（『文苑英華』巻一四五、草木三所収。『全唐文』巻九四九には時期不詳の孫秘の作とされているが待考）がある。王勃の作といずれが先か不明であるが、『文苑英華』には、同賦の後に敬括（『旧唐書』巻一一五に本伝）の賦が収められているので、盛唐以前の作と見られる。内容は王勃の賦と同工異曲である。

(30) 歳八月壬子、旅遊於蜀、尋茅渓之澗。深渓絶磴、人迹罕到。爰有松焉、冒霜亭雪、蒼然百丈、雖崇柯俊穎、不能踰其岸、嗚呼斯松、託非其所、出群之器、何以別乎。蓋物有異類而合情、士有因感而成興。

(31) 已矣哉。蓋用軽則資衆、器完則施寡。信棟梁之已成、非榱桷之相仮。徒志遠而心屈、遂才高而位下。斯在物而有焉、余何為而悲者。

(32) 尹占華『律賦論稿』（巴蜀書社、二〇〇一）に以下のように述べられている。「謝偃《高松賦》写松樹不被人知賞、只能安於深山、王勃《澗底寒松賦》寄託的是志遠心屈、才高位下的不平感；李紳《寒松賦》也是慨嘆不能為時世所用。」（一七六頁）。

(33) 『王子安集注』（上海古籍出版社、一九九五）附録、劉汝霖作成『王子安年譜』に拠った。年譜の初出は『北京師範大学月刊』

（一九三三）。

(34) 初唐の詠松詩には、この他に李嶠の「松」（『文苑英華』巻三二四、花木四所収）、宋之問の「題張老松樹」（四部叢刊続編所収『宋之問集』巻上）がある。いずれも木材としての松を詠うものではない。

(35) 少有文華。好為宮体、詞旨悲苦。不為時所重（『大唐新語』巻八、文章）。

(36) 嵇叔夜之為人也、巖巖若孤松之独立。

(37) 張宣明有胆気、富詞翰。嘗山行見孤松、賞玩久之、乃賦詩曰、（中略）。鳳閣舎人梁載言賞之曰、「文之気質、不減於長松也」。宣明為郭振判官、使至三姓咽麵。（以下略）

(38) 朕遐観前載、歴選列辟、莫不貴此得人、崇茲多士。猶股肱之佐元首、譬舟楫之済巨川。若夫構大厦者、採衆材於山岳、善為国者、求異人於管庫。

(39) 『登科記考』巻三、垂拱二年の条に、顔真卿「顔元孫神道碑」（『全唐文』巻三四一）が引かれ、この年「九河銘」、「高松賦」が出題されたことが記述されている。

(40) 静永健氏の『白居易「諷喩詩」の研究』（勉誠出版、二〇〇〇）、中編・第四章「諷諭詩の読者層――「秦中吟」と「新楽府」――」を参照。また、白居易は同様の構想を用いて「続古詩」其四（『白氏文集』巻二）を作っている。その他、白居易の友人である李紳は「寒松賦」（『文苑英華』巻一四五、草木三所収）に棟梁となれない松を詠い、元稹「松樹」（四部叢刊初篇所収『元氏長慶集』巻一）においても、松はやはり「大厦」を支える棟梁として詠われている。松に対して、これら「新楽府」の作者たちの間では共通の認識があったものと思われる。

(41) 『白氏文集』巻三、『新楽府』序に、元和四年、左拾遺となった時の作であることが記されている。

(42) 白居易「和答詩」については、静永氏前掲書、七五、七六頁を参照。